

「介護」が表す人間関係

The Old Wives' Tale における“nursing”

工藤紅

アーノルド・ベネットに関するヴァージニア・ウルフの批判はあまりにも有名であり、その後マーガレット・ドラブルなど、彼の作品を評価する作家は出てくるものの、未だに彼の作品が賞賛されることは多くない。確かに彼の作品には読者を惹きつけるセンセーションには乏しく、今後も爆発的な人気が出ることはないのかもしれない。ベネットは、*The Old Wives' Tale* (1908)において、2人の姉妹の人生を描いたが、それは、彼女たちの名前が表すように対照的である。

(“Constant”なコンスタンスと“Sophisticate”されているソフィア。)ベネットの作品は、読者を「楽しませる」という側面よりも、徹底した写実に重きを置いているように感じられる。また、それぞれのエピソードは現実味を帯びており、現代社会にもつながるような問題を描いているのである。その中の1つが、“nursing”の問題である。当然のことながら、人間が生活していく中で、病気にかかった人物を誰がどう看護するのか、ということは、避けられない問題である。本発表では本作品における nursing に焦点当てた。

1. アーノルド・ベネットと nursing

ベネットは、自分が慣れ親しんだ町をモデルに「5つの町」を描き、ソフィアのパリでの生活も、彼自身の経験に基づいたものである。彼女は、1871年～1871年のパリ包囲戦を経験し、経営者として切り抜ける。ベネットは「プロの小説家となり、1903年から5年ほどパリに住んでいた」(Wain, 10)。そこで彼は、「パリ包囲戦下での一般の人々の生活が、歴史に描かれているようなドラマティックでも壮大でもスリリングでも、恍惚とするものでもなかったことを、下宿の家主の老夫妻から聞いた」(Preface in *The Old Wives' Tale*, 34) のである。パリ包囲戦という非日常でさえセンセーショナルに描かれないのは、自分の得た情報に忠実に描いているからだと考えられる。

このように、事実に基づき、自らの経験を作品に反映させるベネットは、「介護・看護・世話」の問題にも、彼自身の考えが投影していると考えてよいだろう。この作品が出版された1908年は、ベネットがフランス人女性マルグリット・スールと結婚した翌年である。しかし彼は、1922年に若い女優であるドロシー・チェストンと一緒にいるために、マルグリットの元を去る。マルグリットは1925年に夫に関する本を出版したが、彼女によると、ベネットは「自分のことは自分でする技術があり、どこか体調が悪いときでも、医学の百科事典を見て」(Mrs. Bennett, 106-7) いたという。また、「友人に新しい薬を勧められると、それを試してみるのが彼のお気に入りの習慣」(Mrs. Bennett, 107) であった。そのように医療に興味があったベネットが、「介護・看護・世話」の問題に関して敏感であったことは、想像に難くない。

2. 人生を表す nursing

The Old Wives' Tale の nursing に焦点を当てた時に、最も特徴的なのは、ベインズ家の nursing が全て一方通行だということである。「全知全能」(“omnipotent, all-wise”) とされるベインズ夫人は、娘たちを完璧に管理しようとする。彼女は母親として娘たちを育て、妻として夫を介護するが、彼女は家族から介護を受けることがない。コンスタンスは結婚後、死ぬまで夫の世話、介護をし、息子シジルが自立するまで育て上げる。しかし彼女自身が病気になった時には、夫は他界し、息子は家を離れており、彼女の世話はできない。一般的に nursing が行われる人間関係には信頼が必要であり、最も身近な家族、友人がそこに関わることになるのは自然なことだと考えられる。そして、家族間であれば、親が子の世話をし、子が親の介護をするということも、起こりうる人間関係である。しかし本作品には、ベインズ家に限らず、そのような双方向の nursing が存在しない。「介護・看護・世話」というものが、信頼関係の上に成り立つものと考えられると、本作品における人間関係というのは、いささか「いびつなもの」であると考えざるを得ないのである。

また本作品では、nursing が人生を表しているとも言える。主人公の姉妹が15、16歳の時から亡くなるまでを描いているため、人生の様々なステージで、彼女たちは nursing に関わる。しかし、姉コンスタンスによる nursing に関係するのが家族だけである一方、駆け落ちしてパリで一人暮らす妹ソフィアの nursing に関わるのは、家族以外の人物である。また、コンスタンスが家族の nursing をやり遂げることができているのに対し、ソフィアの nursing は達成することができない。父親はソフィアが目を見ている間に、突然亡くなってしまし、駆け落ちしてすぐに失踪した夫は、再会の際には危篤状態であった。そして、体調を崩した姉を支えながら、共に老後を過ごすつもりであったソフィアは、自身が先に突然の発作で命を落とし、コンスタンスの介護を遂げることができない。ここでもやはり、彼女による介護は成立しないのである。ソフィアの nursing は、するのではなく、されるものであり、そこに関わるのは、家族ではなく、パリで出会った女性たちである。

これらのことは、彼女たちの生き方を示していると考えられる。家族しか関わることのないコンスタンスの nursing は、家と家族を完璧に管理するコンスタンスの家族に対する執着と考え方の狭さを表している。また、コンスタンスの nursing が滞りなく遂行されるのに対し、ソフィアのそれは不完全であり、そのことは後者の孤独を表している。ソフィアの不完全な nursing もまた、彼女の人間関係の希薄さを表していると言えるだろう。

3. その他の登場人物の nursing

コンスタンスとソフィア以外の登場人物も、それぞれの家庭生活の中で nursing に関わっており、ここではマギー、クリッチロウ氏、ダニエル・ポヴィによる nursing に目を向けてみる。ペインズ家に長く仕えていたマギーは、愛する男性と結婚し、世話をすべき子供を持つ。彼女の正直でまじめな性格は、酔っぱらいの夫を献身的に介護していることを容易に想像させ、彼女が結婚生活に満足しているように思われる。また、信頼される人物として育てているマギーの娘の姿は、彼女の幸せが次世代にも続いていることを示唆している。一方クリッチロウ氏は、長年の友人であるペインズ氏のことは思いやりを持って介護するが、発狂した妻の介護はできない。結婚した頃の情熱は 20 年の結婚生活の中で消え去り、発狂による妄想は、妻を自殺未遂に追い込むことになる。それでも利己主義者であるクリッチロウ氏の感情は動くことがなく、彼女の介護を放棄し、妻を精神病院に送るのである。

ダニエル・ポヴィの妻殺しは、彼が町でも目立っていた人物であるがゆえに、読者に最も衝撃を与える nursing の結末である。彼はアルコールに溺れる妻を看護していたが、その妻のせいで、息子ディックは酷い熱風邪をひき、さらに彼女が寝込む息子に夕食を運んで行かず、自ら階下へ行く途中で、階段で滑って足を痛み、何時間も動けなくなってしまう。そのことが最終的な原因となり、ダニエルはどうとう妻を殺害してしまうのである。ダニエルの物語は、彼を尊敬する従兄のサミュエルを通してコンスタンスに伝えられていることが推察されるため、一貫して語りはダニエルに対して好意的である。ダニエル・ポヴィ夫人のことを「下品」で、「黄色がかかった白髪は汚く、曲がった首は不快で、手は忌まわしく、黒い服はボロボロ」の「みだらな女」と表現する一方、ダニエルのことを「ござっぱりしていて、染み一つなく、威厳さえある」(*The Old Wives' Tale*, 249)とするのである。この表現は、確かに読者の中に十分にダニエルに対する共感を掻き立てる。彼の妻が亡くなったのは自業自得なのだという印象さえ与えるかもしれない。しかし一方で、妻の代わりに夫が自分と子供の世話をすることもできたはずだ、と考える読者も当然いるはずである。さらに妻が殺害されるのは、「自分の義務」、つまり「息子の看護」を怠ったためなのである。Nursing を行うことのできない女性は同情されることなく、管理不能な妻の介護に疲れた末に殺人を犯し、処刑されるダニエルが共感を呼ぶこととは、対照的である。

この3組の夫婦の nursing を見てみると、女性であるマギーの nursing のみが成功しており、男性のクリッチロウ氏は全く nursing に関わることはなく、ダニエル・ポヴィは最終的に共倒れしてしまうことになる。語り手によって 10 代のコンスタンスとソフィアは、「賢く、よくしつけられた若い女性たちであり」、「女性であるので、生まれつき看護師(born nurses)なのだ」(*The Old Wives' Tale*, 59)と表現される。ベネットの当時の妻マルグリットは、著書の中で、「最愛の患者を看護するのは楽しいことである」と明言し、nursing は「女性の生まれながらの能力」なのだとしている(Mrs. Bennett, 106)。ここには、「nursing は女性がすべき仕事である」という意味が読み取れるが、それがベネットの抱いていた価値観であるのかどうかは別としても、本作品にこのような概念が垣間見え、当時の共通するものであったことは間違いのない。この概念もまた、現代につながる問題の一つと言えるだろう。

アーノルド・ベネットは読者の興味を引くようなセンセーショナルな出来事を作品中から排除している。しかし、現実に即して描かれた作品だからこそ、彼は *The Old Wives' Tale* において、現代にもつながる社会問題を描くことができたのである。当然のことながら、人間が家庭生活を送る中で、病気の家族を誰がどう介護、看護するのか、ということは、避けられない問題である。本発表では、作品が設定されている 19 世紀後半に、家の内外でどのような nursing が行われていたのかに関する資料を交え、検証することになっていた。しかし、新型コロナウイルスによる様々な不都合により、十分に資料を集められず、検証もかなわなかった。この点に関しては、今後別の形で調べ、研究していくつもりである。

参考文献

Bennett, Arnold. *Friendship and Happiness*. New York: The Review of Reviews Corporation Publishers, 1911.

—. *The Old Wives' Tale*. London: Penguin, 2007.

—. *Married Life: The Plain Man and His Wife*. New York: Adamant, 2006.

Bennett, Marguerite. *Arnold Bennett*. London: A. M. Philpot, 1925.

Wain, John. *Arnold Bennett*. New York: Columbia UP, 1967.